



高橋源次先生

(明治学院大学元学長) に聞く

同志社の英語教育

聞き手

河野 仁 昭

英語をやるなら同志社

——先生、ご出身は関西ですか。

高橋 和歌山です。西国三十三カ寺の三番札所、粉河寺がある町から一里ほど西の池田村で、今の打田町で生まれました。紀の川筋です。一八九九(明治三十二年)の生まれで、中学校は県立粉河中学。

——それから同志社大学の予科へ。

高橋 戦争が済んだ年に入りました。

——戦争？

高橋 そう、世界大戦。

——第一次……

高橋 一九一八年です。それから五年間学びました。

——予科が二年。

高橋 私が本科へ進んだ年から予科が三年制になった。新制の大学になったから。

——新制？「大学令」による大学ですね。

高橋 そうそう、そういう言い方だった。

それまでは、大学といっても「専門学校令」による大学で、卒業しても「同志社大学文学士」だったんだが、私たちのときから国立と同じように「文学士」と言うようになった。

——新制の大学(一九二〇年四月開設)本科へ進まれたわけですね。予科は二年でよろしかったんですか。

高橋 予科のときは旧制だからね。そして、卒業が関東大震災の年だった。

——大正十二年。

高橋 西暦のほうがわかりやすいけど、まあいいや(笑)。記念すべき年に入って、記念すべき年に卒業した。

——どうして、同志社へ？

高橋 理由はすごく簡単ですよ、英語の勉強には同志社ほどええ大学は他になかった。

——中学校の先生かだれかにそう教えられたんですか。

高橋 話ちょっとこみ入っているんだ。

私の父は米屋をしていて、当時、米屋をやるような者はだれしもそうだったらしいが、相場をやった。ところが、それで損をしたんだナ。

——はア。

高橋 それで、家族を置いて友だちとアメリカへ行った、私が五歳のときです。それから五年後に、アメリカで死んだのです。その直前に父に呼ばれて渡米していた私の兄(源

（一）から、死んだ父の形見の頭髪を送ってき
たんですよ。

——お父さんが、何歳のときですか。

高橋 四十二歳。母は三十八歳でした。母
がいうには、「死んだというだけでは、殺さ
れたものやら、どうしたものやらわからん。
もっと詳しい証明かなにか送ってもらえ。
それもそうだといいことで、そういってやっ
た。私が十歳のときです。

——返事は来しましたか。

高橋 来たんだ、二カ月ほどのちに。とこ
ろが全部英語で書かれている（笑）。村中さ
がしたってそんなもの読める人、一人もいな
いわけよ。（笑）

——笑っちゃいけないんですが。

高橋 そのころ、母の幼友達で、県立和歌
山中学の英語科主任をしていた人に、「有本常
太郎という人がいたんです。家では「常た
ん、常たん」といっていました。「常たんは
英語がようでできる先生やから、来て読んで
らお」ということになった。和歌山市から私
の村まで、国鉄で一時間ほどかかりました
が、有本先生はすぐ来て下さったのです。

先生は家へ入るなり、「やすなん（私の母

はやすのという名前なので、そう呼ばれてい
たんです）、何の用や、急に呼びだして」と
言われた。母が「こんなものが来たんやけ
ど、英語はすっかり読めんで」というと、
有本先生は立ったままそれを読んで、「ああ、
脳溢血や、殺されたんやない」

——医学用語もわかるんですね。

高橋 そう。いまの中学や高校の先生で
も、あんなにすぐに読める人は少ないです
よ。私はそのときのことを、いまだにありあ
りと憶えています。が、「何と偉い先生だろう」
と子供心に非常につよく感じました。

後になって、その有本先生が同志社出身だ
ということを知りまして、英語をやるんなら
同志社だと。そして、ああいう人になろうと
思ったんですよ。

*有本常太郎は明治二十八年六月同志社普通学校
卒業。

——高橋先生は小さいころから英語お好き
でしたか。

高橋 粉河中学の同級生に、後に警視総監
になった清原というのがいまして、彼はとて
もよくできましたが、英語はいつも私の方が
よかったです。

同志社大学の先生たち

——十歳のとき出会われた有本先生が同志
社出身だということがわかって、高橋先生の
同志社への進学は決定づけられたと申し上げ
てよろしいかと思いますが、入学されたころ
の同志社には、どんな先生方が……。

高橋 そのことはこの本にも書いておきま
したが、すぐ思い出す先生は、吉岡義睦先
生、石田憲次先生——

*高橋源次著『生命の色』ELEC出版部、一九
七二年一〇月。

——石田先生は京大の先生でしょう。

高橋 出身は京大なんだが、私のころは
同志社の教授だった。同志社で勉強して偉く
なったんです。私らは石田先生によく習っ
た。

その後、台湾に台北帝国大学ができた
て、三高の教授であった矢野峰人さんが台北
へ呼ばれた。私たちは石田先生が呼ばれるん
じゃないかとうわさしていました。矢野
さんが台北へ呼ばれ、その前に厨川白村先生
が関東大震災で亡くなっておられたというこ
ともあって、石田先生は京大へ移ることにな



対談中の高橋先生

ったのです。
—— 厨川先生も同志社へ来ておられたんですね。

高橋 そう、講師として。私たちは文学概論を教えていただいた。そのころ、同志社にはシエクスピアが専門のF・A・ロムバード先生がおられた。ロムバード先生は京大へ講師で行かれるのだが、行かれるとき致遠館の前から人力車に乗って行くんだ。致遠館の二階が私たちの教室だったから、よく見えるわけだ。先生が行かれてしばらくすると、京大から厨川先生がやはり人力車でやってくる。いつも和服を着てね。

ロムバード先生はなかなかおしゃれだった。いつも、いつも、ちょうネクタイをして、胸に花を飾ってね。バラとかスマイルとか

……。家の庭で摘んだのをさして、こういう歩き方で（歩くゼスチャー）入ってくる。立派な人だ。（笑）
—— 吉岡先生は何を教えてられたんですか。

高橋 英語。『スケッチ・ブック』を習いました。速水藤助先生も英語だった。フランス語が草場季彦先生。それから心理学が和田琳熊先生。先生は和田洋一さんのお父さんだ。僕らのとき文学部長でした。中国文学では青木正児先生。のちに山口大学の学長になった方だが、お父さんが医者で、正児とかいて「まさる」と読ませる名をつけたんだ。「陽カタルの児だ」と、先生はよく冗談をいっておられた（笑）。とにかく、私たちはいい先生に習ってるよ。それから予科の竹林熊彦先生。

—— 西洋史？

高橋 そのテキストがマイヤーの *Modern Age* という、あずき色のこんなに分厚いやつ。いわゆる原書なんだ。予科へ入ったばかりの連中に、そんな分厚い原書をもたせて、英語で講義するんだから。粉河中学からやってきた高橋、そりゃびっくりしたよ（笑）。

「さすがは同志社、偉い先生がいるものだ」と（笑）

—— 園頼三先生はもう教授でしたか。

高橋 教授でした。いかにも美学の先生、という感じでね。きれいなお顔していたし。そうそう、英語の南石福二郎先生。この人は膳所中学の出身で、高等学校教員の検定試験にパスした人で、文法が得意だった。熱心なクリスチャンで、よくできる先生でした。

有島武郎のこと

高橋 柳宗悦さんにも習ったなァ。

—— 柳さんが同志社へこられるのは、関東大震災の前ですか。

高橋 集中講義というより、文学と宗教などのテーマで、連続講義でした。兼子夫人は女子部で音楽を教えていました。それから有島武郎。

—— 有島さんにも……。

高橋 ウン、やはり集中講義でした。私たちはいい先生に恵まれていたんだよ。有島さんからはホイットマンを教えていただいた、Whitman's *Poetical Works* という先生が書かれたテキストがあつて。



F. A. ロムバード先生

——私などは有島の訳で『草の葉』を若いとき読みました。今でも憶えている部分があります。

高橋 先生はアメリカへも勉強に行っているし、英語がうまいんだ。ある年、集中講義を終えて東京へ帰られるとき、お別れパーティをした。そのとき先生がいうには、「私は北大で教えていたとき同僚から、有島の英語はだめだ、長くアメリカへ行っていただけでブロークンで、ブロークン・イングリッシュだ」といわれた、というんですよ。

それをきいて、「ぼくの英語はへゆうとうぶろうくん」だ」といって、大笑いしましたよ(笑)。
有島武郎^{ありまぶらう}くんともじったんだ。

——ほんとうにブロークンですか。

高橋 いや、実に英語のうまい先生だっ

た。また、「武郎」は「たけお」と読むので、「ろお」と読まれるのはいやだと言っていました。

有島先生の授業は致遠館二階の大教室だった。いまでもあるでしょ、二階へ上って右手。

——ありますけど、今は事務所になって人事課が入っています。

高橋 チャペルでやられることもあった、聴講者が多いときは、有島先生の話をいまでも憶えているのは、「文学者」というものは、マツチをするだけなんだ」ということばだ。

——はア?

高橋 「文学作品というものは、マツチをするとパツと光がでる。その光を人にみせる、それが私たち作家の仕事なんだ」というわけだ。

——存在それ自体ではなくて、それを照らす光、という意味でしょうか。ファンが多かったようですね。

高橋 非常な人気だった。どこの学生でも有島さんの『生まれ出づる悩み』だとか、そういう本をもって電車に乗っていました。私たちは個人的にも親しく指導をうけました

が、美しく英文を読まれましたよ。

厨川白村のこと

——厨川先生にも習われたといわれましたが。

高橋 厨川辰夫先生は石田憲次先生と非常に親しくしておられた方ですね。京大の英文科も、同志社の英文科も、当時はそれぞれクラス十人ほどの学生で、ごく少数だったし、同志社からも教えに行けば京大からも教えにくるといったぐあいでした。たとえば厨川先生など、私たち個人的に教えをうけたし、お家へも遊びに行ったりですね。奥さんが蝶子さんといって、美人だった。その奥さんが中心になって、「プロフェツサズ・レディーズ・クラブ」というのをつくった。PLCと書いてね、「京都新聞」などにも載った。

——なんですか、それは。

高橋 「京都帝国大学教授夫人クラブ」(笑)。インテリ夫人の親睦会だな。「同志社大学教授だつてプロフェツサーだ」と、私たち学生はいったものですよ。

それはともかく、私たちのクラスは、厨川先生から大事にされたクラスだった。厨川白



厨川白村先生

村といえは、これは当時、日本の大学の英文学界のトップでね、牛耳っておったですよ。——『象牙の塔を出て』という随筆集がありますが、「象牙の塔」ということは厨川先生の発明ですか。

高橋 そうじゃない、外国にあることばを厨川先生が訳したんだ。日本であのことばをはやらせたのは厨川先生だな。要するに、大学教授だからといって研究室に閉じこもってちやいかん、街頭へ出よ、そして世の中のさまざまな人や物事を見よというわけだな、『十字街頭を往く』という本もある。

なにしろ当時の京大英文科は、厨川先生を中心として光っておった。全国一だった。

——脚がわるかったでしょう。ちよっとした傷がもてで左脚だったか切断了と、随筆

にかいてありましたから、多分義足ですね。杖をつけていましたか。

高橋 杖は用いていなかったが、袴をはいて、足をひきずっていました。その厨川先生がいわれるには、「英文学の研究というものは、英語がしゃべれて、書いて、その上でなされるものだ」とね。

私たちのときは同志社のESS、イングリッシュ・スピーキング・ソサイエティが盛んでしてね、大阪の商大と三高と同志社が会場をもちまわりで英語演説をやったものです。あるとき、大阪でやったときですが、厨川先生に来ていただいて、英語の演説をやっていた。

——通訳なしでしょうね。(笑)

高橋 そりゃそうだよ、こちらは英語演説の勉強なんだ。言っちゃア失礼だが、今の英文学の先生で、あれほど英語のしゃべれる人は少ないよ。まして英語演説なんてできっこない。また、文学をやる人は一般には演説なんてしないものです。そして「わたしは文学はわかるけれども、しゃべるのは苦手だ」なんて、平気でいうんだ(笑)。しゃべれもしない者に文学の鑑賞がとれだけできるか。

厨川先生は英語演説でいうんだ、「リード・バイロン。リード・プラウニング」とね。そして英文学をやる者は、スピーキング、ライティング、アプリケーションがでなくちゃ駄目だと。言葉を生体的につかんでないとね。

——教室でもそのような話を。

高橋 もちろんそうだ。英語の勉強という文法をやかましくいうのが普通だが、文法はもちろんだ。しかしもっと大事なことは生きた英語ですよ。言葉として生きてなきや。

生きた英語

——同志社の専任の先生方も、そういうお考えでしたか。

高橋 そうでした、石田憲次先生なども。あの時分、コミュニケーションという言葉はなかった。戦後に使いだした言葉です。

——そうですね。

高橋 そういったこともこの本に書いておいたけれども、コミュニケーションというのは、ザ・フォア・スキルズ、つまりスピーキング、ヒヤリング、ライティング、リード



有島武郎先生

イング、この四つの技能がともなわなくては、十分にコミュニケーションができるとは言えないのです。このごろ、ただしゃべるだけの上滑りした英語になりつつあるようで、これは悲しむべきことです。

とにかく、同志社英文学科の伝統というものは、英語を本当の意味でマスターするところにあるわけだ。小説にしたって、ドラマにしたって、詩にしたって、論説にしたって、すべて英語でもって大きな声で朗読でき、英語で書き、話すことができ、英語で思想の表現ができるのでなきや、本当にわかる、鑑賞し研究することができるとはいえないわけだからね。

——高橋先生が同志社の英文学科で学びとられたのは、そういう英語であったと言っ

よろしいですか。

高橋 そうだ。私たちのうけついで同志社の伝統だな。生きている英語、リビング・イェングリッシュですよ。英語でコミュニケーションができる、英語で意見交換ができる、ということ。それが同志社英語教育の真髄です。そういう英語をマスターしていかないことには、文学の鑑賞も研究もないわけだから。それが厨川先生のお考えであったし、石田先生、吉岡先生のお考えであり、同志社英語教育のあり方だった。竹林熊彦先生は原書を使って英語で西洋史の講義をされるし。

——いい先生方に恵まれたんですね。

高橋 いい先生がいた。たとえばロムバード先生。頭がよくて、クリスチャンで、献身的で、学生の世話をよくされて……。ああいう先生が今もほしいな。

私はロムバード先生には特別にお世話になった。先生は京都教会の英語礼拝の責任者だった。その英語礼拝の説教の原稿を先生がタイプを打ってつくられる、それを私が書記で謄写印刷するんだ。ずっと先生の書記をやりました。

京都教会はいまでも英語礼拝をやっています

すよ、ユニオン・チャーチといってね。あそこの牧師さんは、のちに神戸女学院の学長になった畠中牧師。英語のできる先生だった。

——それは存じませんでした。

高橋 話があちこちするけど、同志社の英文科はいまでも英語劇をやっている？

——聞いていません。女子大学ではEVEに「シエクスピア劇」をやっていますけど。

高橋 私たちのときは、英文科の学生がシエクスピア劇をやった。ロムバード先生が「ジュリアス・シーザー」をやらしたんだ。室町通りの先生のお宅へ行きまして、先生の前で本を読んで、配役を決めてもらった。私が予科一年のとき、皆といっしょに先生の前で本を読んだら、「おまえ、ブルータスをやれ」と言われた。

——ブルータスだと、長い演説がありますね。入学したばかりではむずかしくないのですか。

高橋 そうなんだ、それを「君、やれ」と言われて。そしたら本科のある先輩が、「予科の一年にそんな役をやらせるんなら、おれ止めや」と言っ、やめてしまった(笑)。まア、それくらいみな熱心に行ったわけだ。

ロムバード先生の前の時代はどうか知らんが、私たちのときはシエクスピアをやった。私が本科になってから、シエクスピアばかりやるのも変り映えないというので、モダン・プレイもやるうじやないかと、ゴールズワージーの「ザ・ファースト・エンド・ザ・ラスト」というのをY M C A でやったりしました。シングのアイランド劇とか。チャペルでもやったりし、岡崎の公会堂でも英語劇をやったものです。

——同志社EVEというのは音楽祭だったと思いましたが。岡崎の公会堂などでやって、お客さんはきましたか。

高橋 そりゃ来ましたよ、同志社の英語劇というのは京都じゅうに知れわたっていた(笑)。珍しかったんだな。同志社女子部からも観にきましてね、私が予科一年でブルータスをやったものだから、女学校では私は「ブルータス」でおっていた。(笑)

——女学生も観にきたんですか。

高橋 ミス・デントンなどが熱心でね、「英語の勉強になるから観に行かない」というわけだ。私の家内はそのころ女子部の専門部にいたから、よく知っているんですよ。

——「ブルータス」も？(笑)

高橋 そうそう(笑)。劇といっても単なる遊びじゃなかった、発音などはロムバード先生の指導をうけてね。片山春三君とか榎垣実君らともいっしょにやったことがある。

——「外来語辞典」の榎垣先生？

高橋 そう、よくできる男だった。

——上野直蔵先生と親しくしておられたとうかがいましたが。

高橋 上野さんが入学したのは、私が卒業してからなので、学生時代のことは知らないけど、私が彦根高商の教授をしていたとき、上野さんが訪ねてきてくれたんだ、「英文学研究」というものを同志社英文科で出すので、何か書いていただけませんかといつて。それから知りあいになった。戦後は、上野さんは大学設置基準協会だとかあちこち長のつくことをいっぱいやっていて、私も明治学院の学長だったからよく会いますね。彼はチヨウサーをやっていた。船橋雄さんにやれと言われたんだ。

——そうですね。

高橋 私がロンドンへ行っていたとき、彼はシカゴに留学していて、あらかじめ手紙で

打ち合わせておいて、私は帰りに彼のところへ寄って街を案内してもらったり、いろいろ世話になりました。

インターナショナルズム

高橋 文法も大事だけれども、言葉というのはコミュニケーションの手段なんでね、民族コミュニケーションの伝達手段としての英語ですよ。そういう英語を身につけて文学を論じるというのでなくては駄目なんだ。また、最近、国際化ということをしきりに言いますけれども、そういう英語が身につけていないことにはどうしようもない。

私にインターナショナルということを最初に教えて下さったのは、海老名弾正先生でした。

——海老名先生の総長就任は、大正九(一九二〇)年四月ですから。「大学令」による同志社大学が開校した年。

高橋 海老名先生の前が原田助先生で、私など原田先生が総長を辞める辞めないの騒動のとき入学した。私はその原田先生から、同志社教会で洗礼をうけたのです。

——何年生のときですか。



海老名正先生

高橋 予科へ入った年だ。

——和歌山でも教会へ行っておられたんですか。

高橋 教会へは行っていなかったけれども、ヘールという人が、粉河の名門である児玉家を拠点にして伝道にこられまして、マタイ伝だとカルカ伝だとかのパンフレットをくれるわけだ。それでキリスト教のことは知っていました。そんなこともあって、予科へ入学した年の暮れに原田先生から洗礼をうけて、安部清蔵先生が介添えを下された。それから日曜学校をやったり、都城でも彦根でも教会へ通っていました。いまは高輪教会。家内もクリスチャンで。

その原田先生に代って総長になられた海老

名先生が、チャペルで、インターナショナル・ナリズムということを言われたんだ。先生の説教のあとには、かならずといっていくらしいインターナショナル・ナリズムが出てくるんだ。

——初耳ですね。

高橋 そのころは「国際主義」という日本語はまだ出来ていなくて、「インターナショナル・ナリズム」という言葉で教えられたのです。わからないまま頭に入ってきた。ああいう教え方もあるんだね。あとから、「ああ、こういうことだな」とわかってくる。なつかしいねえ、「インターナショナル・ナリズム」(笑)

——海老名総長は雄弁家だったらしいし。

高橋 非常な雄弁家。こういうふう立派な髭があつて、なかなかいいんだ。その先生が礼拝堂で、「今はインターナショナル・ナリズムの時代だ」と言うわけですよ。

私が彦根高商の教授をやっていたときだけど、学生たちにESSをつくらせて、一生懸命指導していた。そのとき海老名先生にきていただいて英語演説してもらおうと思つて頼んだのです。「先生、インターナショナル・ナリズムの話は英語でやって下さい」といって。しかも「ガウンを着て、角帽かぶってやって

下さい」と頼んだんですよ。

——来て下さいましたか。

高橋 「よしきた」というわけだ(笑)。ESSが主催だから、礼なんてほとんど出来ないのに、彦根まで二時間も汽車に乗って来て下さつてね、ガウン着てやって下さった。実にいい思い出です。

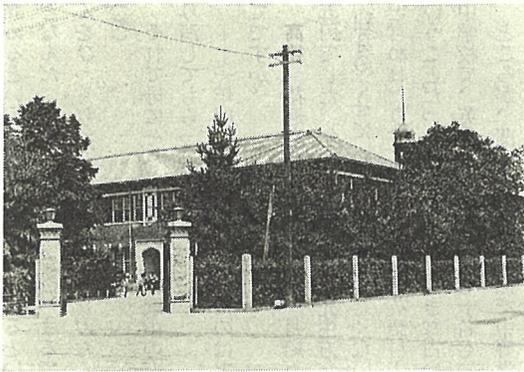
このごろは「インターナショナル・ナリズム」という言葉をよく聞きます、そういう時代になったわけですね。しかし、私たちは六十年前に、インターナショナル・ナリズムでなくはいかん、世界の文化でなくはいかんと、ちゃんと習っていたわけですよ。

——インターナショナル・ナリズムは英語教育と結びつきますね。

高橋 そうだよ、その本にも書いてあるでしょう、「インターナショナル・コミュニケーション」と。同志社の英語は昔から国際英語なんだ、教える方針としては。国際的な伝達手段としての英語、それが生きた英語であり、同志社の英語なんだからね。

英語教育一筋に

——先生は同志社を卒業されて、すぐ彦根



致遠館と校門

高商へ赴任されたんですか。

高橋 そうじゃない。一年間、九州の宮崎県立都城中学で教えたんだが、学生時代には英字新聞の記者になろうと思ったこともあつた。「英文毎日」で知っているでしょう。

——はい。

高橋 「大阪毎日」に尾関岩二という同志社の先輩がいましたが、記者志望なら一度見

にこいといってくれたので、尾関さんのお宅へ泊りがけで行った。非常によく出来る人で、いろんな本なども出している。そのお宅でいろいろ話をきいたり、資料を見せてもらったりして、尾関さんから、ぜひ「毎日」へこいと言われたんだ。ところが、翌朝がちよっと部屋にいなかったとき、彼の奥さんが小さな声で、「高橋さん、新聞記者にはなりなさんなや」と言うんだ(笑)。「給料はいいから、夜も何時に帰ってくるやらわからん商売やから」と。亭主は「こい、こい」と勧めてくれるし、奥さんは「止めとけ、止めとけ」言うし。(笑)

——よわかりましたねえ。(笑)

高橋 奥さんにそう言われたからというわけではないけれども、結局、新聞記者にはならなかった。

——それで都城中学へ?

高橋 私が卒業するころに都城中学の英語の主任が辞めたものだから、松原兼助という校長が後任を探しに京大へきたんだ、文部省へ行つたついでだったと思うが。ところが京大には適当な人がいなかったの、同志社へ

行きなさいといわれて、松原校長は和田琳熊先生に会われた。和田先生が私を推薦して下さいましたので。

——なるほど。

高橋 私はそのころ西寮の二階に住んでいましたが、洛北教会の日曜学校から帰つてみると、松原校長は私の部屋の入口にきちんと立って待つておられるんだ。礼儀正しい人だと思つたなア。

そこで初対面のあいさつをして、部屋へ入つていただいたんだが、実に丁寧な方だね。和田先生も行けといわれるし、校長先生もぜひと言つて下さるので、まア行くことにしたわけです。

そのことを母に言つてやった。私は早く父を亡くして母の手一つで育てられましたから、何でも母に相談して決めていたんです。ところが母は、和歌山中学の有本先生に頼んで、和歌山中学へ行くように私のことを決めていたんだ。

仕方ないから正月休みあけに和田先生にそう言いに行つたら、先生、怒つたねえ、「あんたはもう、あんなだけの高橋源次じゃないぞ。同志社卒業生の高橋だ。あんたが都城を

辞めるといふのは、同志社が辞めるといふことなんだ。わかったか？」(笑)。まるで鉄びんをひっくり返したような叱り方なんだ。(笑)

それで母にそう言つてね、和歌山の方をとり消してもらつて。

——一年間しかつとめなかつたのはどうしてですか。

高橋 待遇もすぐよくてね、月給百二十五円でした。年輩の家庭もちの先生方から、「独身のくせにわしらよりええじゃないか」と言われたりするほどだった。英語科主任と云うことだったわけだろう。大きな古い県立中学校で、英語の先生だけでも十名もいた。

ところが、関東大震災の關係で中等学校教員の免許証が、高等学校の免許証よりあとから送られてきたといつたこともあつたんだが、勤めて一年たつたため間に、西南学院と彦根高商と両方から、来ないかといつて下さつてね。

彦根高商には、同志社から行った吉岡義雄先生がおられたんだが、吉岡先生がイギリスへ行かれるので、その後釜にということなんだ。一方、西南学院の方は石田憲次先生の推

薦だった。

——両手に花ですね。だけど両方とも恩師がからんでいるから。

高橋 むずかしいんだ。どちらもいいものだから。それで母に相談したわけです。すると「西南学院で、どこにあるんや」というから「九州や」といつたら、「九州みたいな遠いところ、おまえが嫁もろても行つてやらんぞ」(笑)。和歌山の田舎の人だからね。

——彦根ならいいと？

高橋 「彦根でとこや」(笑)。彦根も知らんわけですよ。「京都のむこうに琵琶湖あるやろ」「琵琶湖なら知ってるわ」「そこやがな」「そこなら近いから、嫁もろたら行つてやるわ」(笑)。そんなことで、西南学院を断つて彦根へ行くことにしたんです。

——いいお母さんだし、いい息子さんですねえ。

高橋 母一人に育てられたものだから。とにかく、私はいろいろな点で恵まれていました、体もこうして健康だし。

——米寿でしょう。

高橋 そうなんだ。

——彦根高商に就任なさつたのは何歳のときですか。

きですか。

高橋 二十五歳。年俸千五百円の講師の辞令をもらつた。月割にしたら都城中学のときの月給とかわらないものだから、庶務課長のところへ、間違いないかとききに行つたの。そしたら課長、怒つてね、「先生は年俸でしよう」と言うんだ。「そうだけど、月給の十二倍が年俸だろう」「何を言っているんですか、私などは判任官だから月給ですが、先生は高等官ですよ。私などと立つている所がちがうんです、だから年俸なんですよ」。私はそのときはじめて、高等官だの判任官だのといふものがあることを知つたね。

——年俸千五百円はいい給料でしょう。

高橋 左様、よかつたんだ。

——先生の英語教育のお話を、もつともつとうかがいたいんですが、紙面の都合がありますので、今日のところはこの辺りまでにさせていただきます。興味ぶかいお話を、ほんとうに有難うございました。

(一九八七年七月二十二日、同志社東京分室で収録)

(補記) 高橋源次先生の米寿をお祝する会編『高橋源次博士著作目録』(一九八七年一月刊)がある。